（被災地スタディツアー報告書）

東日本大震災から５年

～被災地の女性７人の語り～

箕面市人権啓発推進協議会
男女協働参画啓発研究部会

目次

1. はじめに ・・・ 1

2. 訪問インタビュー

（1）宮城・仙台

・草野祐子さん ・・ 2

・イコールネット仙台 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

・やはたえつこさん ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9

（2）宮城・南三陸町

・大森つや子さん ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12

（3）宮城・気仙沼

・吉田瞳さん ・・ 17

（4）宮城・大島

・小松万里子さん ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21

・白幡てるみさん ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24

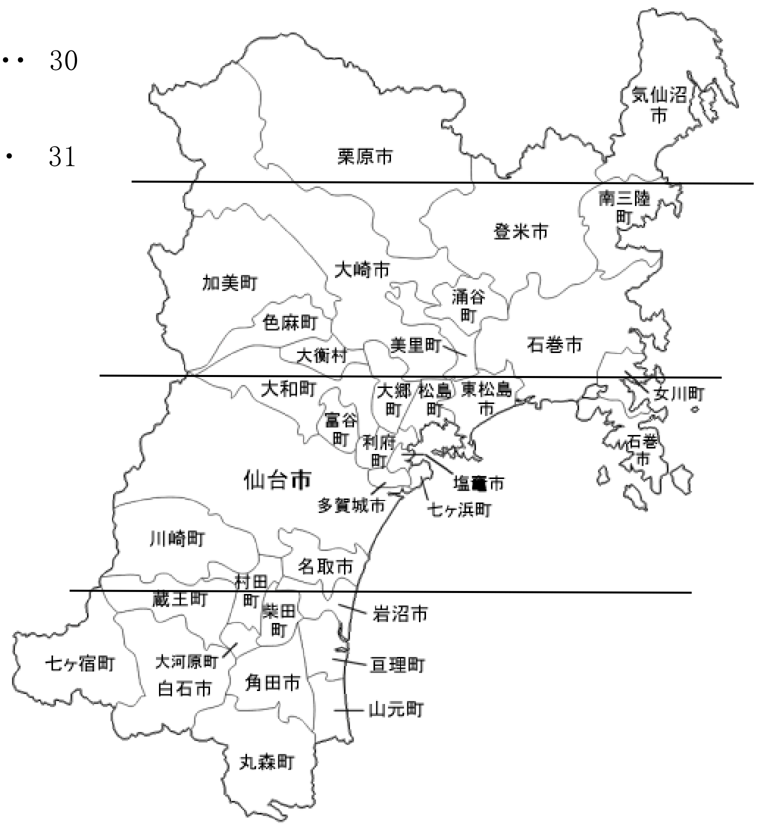
3. ジョネットサロンの報告

みやぎジョネットの活動に参加 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28

4. 付録

スタディツアーの行程表 ・・・・・・・・ 30

5. 編集後記 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31



はじめに

平成23年(2011年)3月11日、東日本大震災が発生。直後から報道される映像を見ながら、なにか自分たちにできることはないかと話合いを繰り返しました。会のメンバーの中には平成7年(1995年)1月17日阪神淡路大震災において様々な支援を経験している人も多く、その経験を共有しながら、会として女性の人権を守るために、まず各テレビ局に対して偏った報道がなされないようにハガキで要望書を送り続ける活動を行いました。

同年10月、大きな被災を受けた仙台で開催された「全国シェルターシンポジウム2011」に参加し、その際、仙台、石巻、南三陸の被災地へ「みやぎジョネット」代表の草野祐子さんに案内してもらい、現地の状況を知ることができました。そして 12 月には、「ハーティ仙台」代表理事のやはたえつこさんに「第26回みのお市民人権フォーラム女性分科会」に来ていただき、被災地での女性の支援についてお話しいただきました。

また、親組織である箕面市人権啓発推進協議会においては、平成25年(2013年)から3年間、被災地義援活動の一環として被害の大きかった東北三県を回るツアーを実施し、様々な団体、組織、個人等との交流を深め、つながりを持ち続けています。

震災後 5 年の月日が経過し、がれきの撤去、かさ上げ工事などハード面の復興は一見進んでいるように見えますが、今後はソフト面も含めたより一層の復興が求められます。そのためにも、被災した人々、とりわけ女性たちはこの大震災でどのような体験をし、今どのように生きておられるのかを知ることが、本年 7 月に被災地訪問スタディツアーを実施した目的の一つでした。

このたび、「第31回みのお市民人権フォーラム女性分科会」の開催に合わせてスタディツアーの報告を小冊子にまとめることができました。多くの皆様に「3.11 東日本大震災から5年」を手に取って読んでいただき、仙台、南三陸、気仙沼で出会った女性たちのメッセージをお届けすることができればと願っています。

訪問インタビュー

1 宮城・仙台

草野祐子さん

プロフィール

東日本大震災直後の平成 23 年(2011 年)5 月、被災地女性と全国支援者の思いを結ぶことを目的に発足した「NPO 法人みやぎジョネット」(みやぎ女性復興支援ネットワーク)の代表。仙台市に事務所を置きながら、毎日南三陸町防災対策庁舎横のトレーラーハウス「ジョネットハウス」に通って南三陸町の各地でサロンを開き、女性たちの様々な悩みに寄り添い支援する活動を行っている。また、女性の就労や起業支援、漁業や農業に携わる女性たちの生活再建も応援し続けている。

日時:平成 28 年(2016 年)7 月 2 日
場所:仙台国際ホテル　中華料理“翠林”(※1)

南三陸の女性について

平成 23 年(2011 年)の震災以降、福島～岩手～宮城と多くをまわった。その中で宮城の北部沿岸部の女性の様子に違和感を覚え、このままでは復興はしないのでは？と危機感をもち、年末に南三陸に力を入れていくことにした。北部の女性は、男の人の下で生きるのが当たり前になっている。女性は一番に「お父さんに聞かないと」と言う。お父さんって「父親？」「夫？」。家からは、はみ出せないし、「あそこの嫁は」「あそこの娘は」と言われる。地域が女性を監視している状況がある。自分の意見はあるが言えない。押さえつけられていて、意見を表明する機会がなかった。チャンスが与えられないと会話能力もあがりにくかったのだろう。仕事に就き働きだすまで自分の貯金通帳や口座はなかったし、お金の使い方もよくわからなかった人もいた。南三陸の女の人に、違う世界もあるよ、違う選択もあるよと伝えたい。

「みやぎジョネット」について

現在スタッフは 8 人いる。緊急雇用で予算があった時は 20 人ほどおり、最高齢は 90 歳代、しっかり働いてきた人(元保健婦)や地域の女性の集まりのリーダーをしていた人もいた。「みやぎジョネット」でスタッフとして働くことにより、「人として変わる」「顔つきが変わる」「欲が出てくる」「きれいになった」など、地元の女性にとってのモデル的な存在になり、私も働きたいという人が出てくると、やっていて良かったと思う。スタッフが変化すると、「サロン」(※2)に来ている参加者の様子も変わってくる。「みやぎジョネット」は地元の人が地元の人に働きかけられるように支援している。南三陸で女性の仕事がもっと生まれてくるといいなと思っている。

防災教育について

「みやぎジョネット」は、防災減災事業に力を入れており、第 3 回国連防災会議(※3)ではフォーラムを開催し、イグナイト」(ignite=点火させる、火をつける)ステージでの意見発表などを行った。リュックに何をどれだけ入れておくのかというのは、とりあえず何日間かやり過ごす、生き残るための方法である。防災、減災教育とは、「逃げる」だけでなく、「どんなにひどい災害があっても、必ず私は立ち上がる」というその

後の復興まで見据えた教育が大事だと思った。最初の 2 カ月間が大切と考えている。意気込みがあるうちに働きかける必要がある。

5 年目の南三陸

草野祐子さん

震災から 5 年がたち、建物ができ、ライフライン等の復興については加速しており、今年度中には南三陸に復興住宅が完成し、住民が移り住む予定となっている。住む人の気持ちは置いてきぼりになっていると感じている。住民にあきらめやいざこざが出てきている。人の心としてはよくない状況があると思う。

今まで 5 年間、仮設住宅での生活は、あきらめつつも皆と一緒にやっていかないと、ここでしか生きていけないと思い、笑顔をつくってそれなりにつきあってきたはずだったけど、今のサロンでは人を非難することが平気になってきている。「あの人はもうあそこに行く」「私はこっちなんだ」と言いたいことを言うようになってきていて、サロンに行きたくないという人も出てきている。

復興住宅の問題

5 年間も仮設住宅にいて、心はボロボロ。でも、復興住宅に移るとマンションなのでなじめない。ドアを閉めたら、「出ないで」「来ないで」の気持ちになってしまう。

共益費問題もある。共益費は 6～7 千円だが、今まで一戸建てに住んでいた人にはなじみにくい。「自分は寝たら共同灯は要らない」や、「エレベーターも使わないし、共益の電気も使わないから払いたくない」といった人もいる。集会所は地域ごとに使用しているがその開催の頻度が地域ごとに違うので、「よく使う人が水道代や電気代を払えばいい」との声もあがり、集会所が使いにくくなっているところもある。

復興住宅では（理事会の）会長が共益費を徴収する係になっている。共益費を払わない人がかなりいるので、会長になり手がいなくて、決まるのがやっとだった。

新たな人間関係の構築の課題

仮設住宅にはいろいろな地区からの人が入ってきている。町ごとに入居をとの思いは実現されず、怒りもあったが、あきらめて何とか「よってかん？」と近所で声かけ合う関係ができてきた。5 年かけて作った人間関係をこわして復興住宅へ移ることへの抵抗がある。人間関係をまた最初から作るのはしんどい。もっと早くに仮設住宅から元の町へ戻れるようにすべきだったと思う。震災後の 1、2 年あたりが、みんなが手を携えてやれる時期だった。その時にすべてがスタートしていたら違う形になっていたのではないかと思う。仮設住宅は、生活しやすい住宅にはほど遠く、細かな配慮ができてなかった。生活感覚の乏しい人が計画していたのだろう、いろんな意味でやり方がまずかったと思う。

「サロン」のこれから

社協さんなどは集会所で体操をされているが、ジョネットの「サロン」はみなさんにとって特別の様子。みなさんに「待たれている」のです。「みやぎジョネット」で実施している「サロン」はお茶のみでもないし、ものづくり会でもないし、個人とのつながりです。形はいろいろあり、通常の「サロン」のほかに「個別サロン」や「お出かけサロン」など、地区をまたがって縦横無尽に開催している。いずれは南三陸だけでなく、町を超えて、人のつながりを作るモデルケースになりたい。

雇用政策の失敗

今、若い人が働こうとしない。一概には言えないが、「三年間の緊急雇用」政策は問題を含んでいたと思う。25 万円／月もらう体験を何年もしてしまうと、安い賃金で働かなくなる。何もしなくても 1 万 2 千円／日はありえない。働く気になれない人が出てきている。（気仙沼では、漁業の求人を出しても応募がないらしい）雇用が復活してきたが、スキルが求められ、そもそも女性に人気の事務職などの仕事は多くない。

ジェンダー主流化が重要

災害が起きて、正直に言って助かるかどうかは運命というところが大きい。どれだけ日常で考えていても、災害ってそのつど違うし、助かり方も違う。その後の避難所生活で少しでも住み心地良く、みなさんが助かって良かったと前を向けるようになるには働きかけが必要である。わかっていても初めての経験では、常日頃からできてないことはできない。災害にあって今思うのは、女性が政治の世界に一人でも多く出ないといけないということ。「ジェンダー主流化とか男女共同参画は当たり前」が、私たちの生き方の基本だと強く思った。「避難所運営にジェンダー意識を」とか言われても、女性の側にその意識がなければ、何のことか具体的には出てこない。

災害に立ち向かうために

『女性を育てる』こと、東北ではこれが大事なのです。自分を大切に、日頃から自分は大事ということを母親から伝える。生きる力、育てる力を伝える。自立した母が育てた子は自立した子になる。災害が間近に迫った時に、大人の誘導を待つのでなく自分で判断できる子に育てる。防災教育の中で、人権、ジェンダーを教えていくことが必要。熊本でも思ったが、伝統文化(熊本では手毬など)がある町で「お金」に触ったことのある女性は元気で強い。表向きは男性社会に組み込まれていても、どこかに自分というものがあると思う。やはり経済自立が必要です。震災のあと、支援を受けて逃げてきているのに、夫に電話している女性がいた。保健師が健康診断の時に DV 被害の状況を聞けたらいいなと思っている。災害時の対応や、子どもたちにいろいろなノウハウを取り入れた教育を担うところを作っておくこと。何かあった時に動ける機能を持ったグループを作ることってとても大切である。『女性を育てる』ことが大事なのです。

翠林（※1）
中華料理店“翠林”は、宮城県北部沿岸部の女性たちを応援するメニューを出してくださっている。「みやぎジョネット」は、質のいい物を作っているけれど、市場に出せないなど販売する場を持てていない女性の応援もしているので、今回のインタビューの会場に“翠林”を推薦してくださり、雄勝、南三陸、気仙沼の特に女性たちが深く関わっている食材を堪能した。

「サロン」（※2）
災害後の平成 23 年（2011 年）5 月 21 日に「ジョネットサロンをあなたの地域で開きます」と呼びかけて以降、小さな避難所、自宅、仮設住宅などありとあらゆる場所で、お茶を飲み、手芸など手を動かしながら語り合うサロンを開催し続け、老若男女が集う場となっている。

第 3 回防災会議（※3）
国連主催の世界会議。第1回は平成 6 年（1994 年）に横浜市で、第2回は平成 17 年（2005 年）に神戸市で、第3回は、平成 27 年（2015 年）3 月に仙台市で開催された。兵庫行動枠組の後継となる新しい国際的防災指針「仙台防災枠組 2015-2030」と、会議の成果をまとめた「仙台宣言」が採択された。

訪問インタビュー

1 宮城・仙台

イコールネット仙台　油井由美子さん
佐藤勝子さん
渡邉睦子さん

プロフィール

30 年以内に 99%の確率で起きるといわれた宮城沖地震に対して、女性たちはどんな不安を抱えているのか知るために平成 22 年(2008 年)、「震災時における女性のニーズ調査」を仙台市の女性 1100 人を対象に実施。その後「女性の視点からみる防災・災害復興に関する提言　①意思決定の場における女性の参画　②女性の視点を反映させた避難所運営　③多様な女性のニーズに応じた支援　④労働分野における防災・災害復興対策　⑤災害時における DV 防止のための取組の推進　⑥防災・災害復興に関する教育の推進」をあちこちで伝えている最中に東日本大震災が発生した。すぐさま避難所に駆けつけ女性たちのニーズを把握し支援を行う。平成 25 年(2013 年)からは女性のための防災リーダー養成講座を開催するなど女性の視点に立った様々な事業を展開している。

「NPO 法人イコールネット仙台」は「せんだい男女共同参画財団」の委託を受け、男女共同参画を推進するNPOや市民グループの活動拠点として設置された市民活動スペースを運営している。

日時:平成 28 年(2016 年)7 月 2 日
場所:エルパーク仙台

避難所の実態

私たちは、仙台市、登米市、東松島市、栗原市、気仙沼市等々の避難所や仮設住宅に伺い、避難所での女性たちの状況を確認し、洗濯代行・物資支援など女性のニーズを掘り起こしての支援を行いました。避難所では「リーダーは多くが男性で、女性の声が届かない」「プライベート空間が確保されていない」「仕切りがなく、更衣室や授乳室がない」「隣に知らない男性が寝ている」といった女性ならではの困難の数々を、私たちは目にしてきました。また、「子どもやお年寄りをつれて避難している。介護施設も被災し、仕事に行けない」「女性に必要な物資が届かない」「下着のサイズが合わない」のほか、化粧品会社から女性たちに人数分の充分な化粧品をいただいたのに、男性が「寝た子を起こすな、そんな贅沢はいらない」と言ったため受け取れなかった現実がありました。

被災地の女性の声をまとめる

被災地で女性たちがどんなことを経験して何を考え、どう行動したのかを記録するべきだと思いました。また、被災や復興時に顕在化する女性たちの課題を解決するためのデータが必要だと考えました。

そこで、平成 23 年(2011 年)9 月・10 月、宮城県内の女性 3000 人を対象にアンケート調査を実施しました。1512 人(50.4%)からいただいた回答の自由記述欄には、私たちが思った以上のものすごい数の当事者たちの言葉が書き添えられていました。その調査結果をもとに「男女共同参画の視点からみる防災・災害復興に関する提言」を作成しました。

復興計画に女性の視点を

被災者は支援者でもあります。

女性は、食糧や飲料水の助け合いや避難所の支援、隣近所の安否確認などにかかわり、決して、守ってもらうばかりの立場ではありませんでした。避難所や仮設住宅では「復興計画策定の論議の場に女性が必要」と思う方が 85%おられました。

これらのことから、復興計画に女性の視点を反映させるために盛り込むべき内容を①障がいのある人、妊産婦、病人、高齢者、子どもなどのニーズを踏まえたきめ細かなサポート体制を整備する②女性の地域防災リーダーや災害復興アドバイザーを育成し、地域に住む人々の支援体制を実効性のあるものにする③女性の視点に配慮した避難所運営マニュアルをつくる④避難所や仮設住宅の運営に女性の参画が必要であることをマニュアル化する、の4点としました。

日常生活の中に女性の参画が大切

③と④は女性がリーダーになるために大事なしくみです。女性が手を上げにくかったり、まわりの女性も認めにくい状況ではこれらは必要なこととなります。従来の性別役割分業を引きずっては、女性は防災・復興の主体にはなれません。例えば今までの防災復興会議の女性委員は、内閣府 16 人中 1 人、岩手県 19 人中 2 人、福島県 11 人中 1 人、宮城県 12 人中1人です。市町村では女性委員のいないところも多い。女性委員を増やして女性の声を届けないといけないです。復興を進めていくには、日常生活の中にどれだけ男女共同参画が実現されているかが大切なのです。非常時になって、さあやりましょうといっても遅いのです。

当事者たちの言葉（自由記述より）

家族関係が変化して抱えた困難

震災後独り暮らしとなりストレスで辛い/自宅が被災し夫の実家で同居し気遣いが多い/姑が亡くなり舅の認知症が進んで乱暴になった/夫が亡くなり収入が無くなった/親戚家族が被災し同居。食事などの世話で体調を崩した/仮設住宅が狭い為、家族が分散して生活/子どもが震災の恐怖で離れたがらなくなった。

地域との関係性で

働いている女性は地域にいないので地域との繋がりがうすいし、避難所でも居心地が悪い/若い方だと地域ごとの仮設住宅入居は、古い人と新しい人との関係が上手くいってないことが多い。そのままの状況で仮設住宅に持って来てしまうことになる/避難所で仲良くなった人と一緒に仮設に移転したかった/地域が必ずしも過ごしやすい場所ではないこともある。人を排除しない、孤立させない地域とはどんなものなのか、どうしたらいいかがこれからの課題となる。

仕事に関して

職場が被災し解雇となった/仕事が見つからない/仕事が激減し収入が減った/家族を守れるのは自分しかいないので、退職した/子どもが心配で職探しができなかった/非正規雇用が多いので、失業・退職・転職などの困難を女性が受けやすかった。

健康面で

被災したことを思い出すと恐怖で涙が出てくる/不眠が続いている/精神的に落ち込み、喪失感が漂っている/過労からうつ病を発症し治療中/仮設住宅に入った途端、壁・畳の薄さがあった/隣のお宅の TV の内容がわかる/子どもには静かに騒がせないよう、ついきつく叱ってしまう/時間が経過してもストレスは軽減されない。

女性の防災リーダーの養成

イコールネット仙台の皆様

私たちは調査を通して、女性の防災リーダーが必要だと考え平成 25 年(2013 年)から養成講座を開催してきました。女性が急にはリーダーになれません。女性が防災リーダー・主体となるためにみんなで力をつけていく場として講座を行ってきました。

平成 25 年(2013 年)には仙台市内の 30 名を募集しましたが、仙台市外の方も多く 50 名が応募されました。5 回の連続講座のテーマは①災害・復興と男女共同参画 ②仙台市地域防災計画を知る ③震災で起きていること…DV と児童虐待 ④障害の特性と対応を知ろう ⑤災害時こんな時の対応は？でした。

また、受講して終わりなのではなく、その方の地域に戻って地域で実践することをお約束しています。地域で防災の取組をし、「イコールネット仙台」がサポートします。それから、1 期生が 2 期生の講座を運営し経験を積む場となっています。3 期生の講座でも 2 期生が運営するかたちをとっています。その後、受講者は地元にもどって市とかけ合って講座を開催したり、防災宣言を作る会を立ち上げたり、子ども向けの防災ゲームをワークショップしたりと活動を様々に展開していくといった広がりを持つようになっています。

女性防災ネットワークでのスキルアップ

仙台市以外では、陸前高田市、石巻市、岩沼市、大崎市、利府町、塩釜市、山形市、福島市からも参加がありました。トータル 100 名以上の方が受講していますが、どんなに声をあげても地域に戻ると独りだったりします。それで、ここで学んだ仲間と「女性防災ネットワーク」を立ち立ち上げて横のつながりを確保し、地域でいろんなことがあってもここへ戻ってきて力や情報を得て、また地域で活動するようなスキルアップしながらのしくみ、現場同士が支えあうしくみを作りました。

第３回国連防災世界会議が仙台開催

平成 27 年(2015 年)3 月 14 日～18 日、第3回国連防災世界会議が仙台で開かれました。ここエルパークが「女性と防災」テーマ館となり、女性とリーダーシップをテーマにシンポジウムを開催しました。この世界会議で「仙台防災枠組 2015-2030」が採択され、すべての政策と実践においてジェンダー、年齢、障害の有無、文化的視点の重視、女性と若者のリーダーシップ促進などが指導原則として盛り込まれました。これまで防災分野で大きな発言権がなかった女性がリーダーシップを発揮する人として焦点があてられたのです。

エルパーク仙台の情報版

40 人の女性たちの現状

平成 23 年(2011 年)9 月と 10 月、市職員、学校教職員、介護施設職員、セクシュアルマイノリティ等々、ライフスタイルの違う 40 人の方から聴き取ったお話をまとめ、「40 人の女性たちが語る東日本大震災」の冊子を発行しました。

現在 40 人の中の 25 人の方に、5 年経った現状や現在のお気持ちをお聴きして、実は今テープ起こしの作業をしています。作業をしていて感じるのですが、震災の時にはまとまって話をしてくださっていたみなさんが、不安定というか、まとまりの

ない話をグルグル繰り返されたりします。5 年経って住所がわからなくなった方、うつになっている方、当日に約束をキャンセルされる方、もうインタビューを受けられないという方もいます。何年経ったから解決するというものではないとヒシと感じています。お一人おひとりの回復の仕方が違う事を実感しています。現実が前より落ち着いてない感じがします。5 年前よりテープ起こしが難しくなっています。

どうしても 3 月 11 日が近付くと心がざわついて、その日の前後の記憶が鮮明に蘇ってしまう。普通は 1 年が大晦日で終わるが、5 年たっても 3.11 で始まり 3.11 で終わるという方もおられました。

女性の人権意識の低さ

調査・聞き取りをして見えてきたこととして、女性の人権意識の低さがあります。それが女性を嫁だから女だから我慢して当たり前にしてしまう。避難所にいても、がれき処理の男性は有償だけど掃除・食事の世話は賃金が発生しません。そういった役は女性に回ってくるのが現実でした。

【わたしたちのあゆみ】

1995年7月
仙台市の女性センター建設計画を受けて、「わたしたちの女性センターを実現する会」を発足しました。

2003年3月
新しい女性センターの設置が決定し、「実現する会」の活動の次のステップとしてジェンダー問題に幅広く取り組む「イコールネット仙台」を立ち上げました。

2003年5月
「エル・パーク仙台」「エル・ソーラ仙台」2館体制の「仙台市男女共同参画推進センター」が誕生しました。
「イコールネット仙台」は、特定非営利活動法人資格を取得しました。

2003年6月
「エル・パーク仙台 市民活動スペース」管理運営受託団体となりました。

「災害と女性」の取り組み

2008年
「災害時における女性のニーズ調査」実施
2011年
「東日本大震災に伴う『震災と女性』に関する調査」
2012年
聞き取り集「40人の女性たちが語る東日本大震災」発行
2015年
聞き取り集 英訳版発行
2013年～2015年
「女性のための防災リーダー養成講座」開催

会員募集

「特定非営利活動法人 イコールネット仙台」の活動に賛同し、会員になってくださる方を募集しています。

正会員
個人：年会費 1口5000円 1口以上
団体：年会費 1口5000円 1口以上

賛助会員
個人：年会費 1口2000円 1口以上
団体：年会費 1口2000円 2口以上

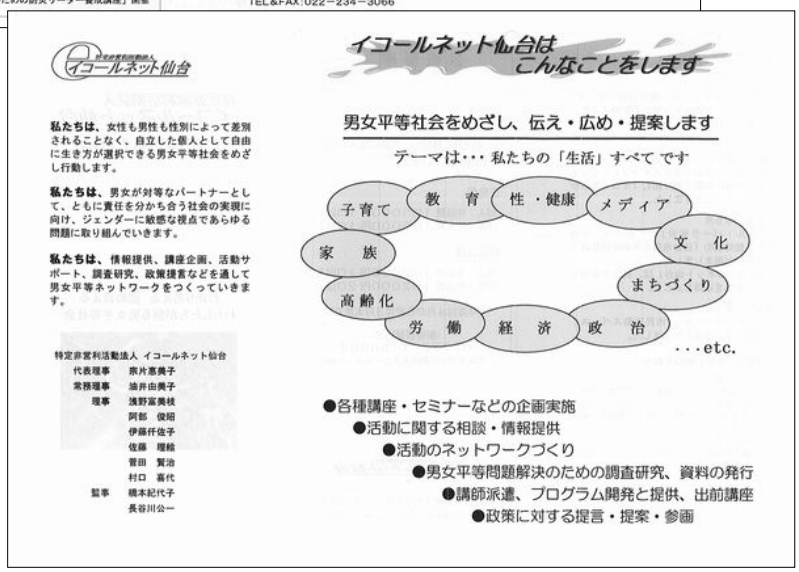
（年度は4月から翌年3月末まで）

〈郵便振替口座〉
02270－1－60964
特定非営利活動法人イコールネット仙台

特定非営利活動法人
イコールネット仙台
INFORMATION

わかりあえる 認め合える
わたしたちが創る男女平等社会

イコールネット仙台
仙台市青葉区上杉6丁目2の25（宗片方）
TEL＆FAX:022－234－3066



イコールネット仙台

私たちは、女性も男性も性別によって差別されることなく、自立した個人として自由に生き方が選択できる男女平等社会をめざし行動します。

私たちは、男女が対等なパートナーとして、ともに責任を分かち合う社会の実現に向け、ジェンダーに敏感な視点であらゆる問題に取り組んでいきます。

私たちは、情報提供、講座企画、活動サポート、調査研究、政策提言などを通して男女平等ネットワークをつくっていきます。

特定非営利活動法人 イコールネット仙台
代表理事 宗片恵美子
常務理事 油井由美子
理事 浅野富美枝
阿部 俊昭
伊藤仟佐子
佐藤 曜絵
菅田 賢治
村口 喜代
監事 橋本紀代子
長谷川公一

イコールネット仙台は こんなことをします

男女平等社会をめざし、伝え・広め・提案します

テーマは・・・私たちの「生活」すべてです

子育て 教育 性・健康 メディア 文化 まちづくり 政治 経済 労働 高齢化 家族 ・・・etc.

●各種講座・セミナーなどの企画実施
●活動に関する相談・情報提供
●活動のネットワークづくり
●男女平等問題解決のための調査研究、資料の発行
●講師派遣、プログラム開発と提供、出前講座
●政策に対する提言・提案・参画

訪問インタビュー

1 宮城・仙台

やはたえつこさん

プロフィール

暴力被害女性、主に DV 被害者および性暴力被害者をサポートするさまざまな活動をしている「NPO 法人ハーティ仙台」。その代表理事であり、助産師として講師の仕事や講演、「ハーティ仙台」の啓発、相談活動をしている。「誰かひとりが頑張っても問題は解決しない。警察、行政、NPO、民生委員会、人権委員会など多くの人がつながり、重大な事態に至る前に、被害者が支援にたどりつける事が大事」と語る。震災後は特に、仙台だけでなく地方へも出かけて、予防啓発や相談事業に取り組んでいる。

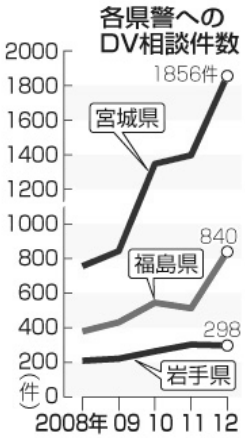
日時：平成 28 年（2016 年）7 月 2 日
場所：やはたえつこさんの自宅

震災後のＤＶ支援について

「ハーティ仙台」のスタッフは DV サバイバーが多い。そのスタッフが、被災地で心のケア講座の講師を行い、当事者としてのサバイバースピーチをしている。そのことで自尊感情が上がる。みんなが主役になることが大事。私だけが講師をやるのでは効果は少ない。 事件の深刻化を防ぐとは、例えば福島の仮設住宅のDV殺人事件。仮設住宅から、夫（70代）に殴られた妻（60代）が出てきた。周囲の人は「大丈夫ですか」と心配したが、「大丈夫です」と家に戻っていった。その時、周囲が「心配です」と警察官を呼び、彼を拘留すればよかった。怪我をしているのなら暴行傷害で逮捕する。女性は一時でも離れられる。でも現実はその女性は戻り、また殴られて殺されてしまった。近所の人が「暴力事件だよ、これはほっとけない」と、110 番をすれば殺人は止まったと思う。

仙台でも震災後に 80 代の DV 殺人事件が 2 回もありました。老年期の夫が妻を殺害した事件です。子どもも孫もいることでしょう。どれだけ親族もダメージを受けたことか。刑務所に老年期に入るのですか。殺人事件が起きる前に止めることが大事です。騒ぎが起きた時に、警察の介入があり殴っている人が拘留されると、女の人は一時的に離れることができる。そこで夫と離れても生きていく方法があると知ることが大切。年金分割とか財産分与がなくても、生活保護がある。安全に生きる方法があることを、積極的に伝えることが大事です。

宮城県は震災後、警察へのDV・ストーカーの相談件数が人口あたり日本一多いです。 東北大学教授の沼崎一郎氏（「ハーティ仙台」の仲間）が「相談が多いのは汚名ではない、相談できる環境がよくなったからです。多くの部門が効果的な啓発をしたから相談が増えた。それでも、まだ氷山の一角。相談件数が日本一になったのは名誉なことです」と河北新報に投稿しました。検察も、県警も当然読みます。その後の県警のコメントは「相談しやすくなったので、こんなに相談が増えたと思える」です。宮城県の検察は、ストーカーの拘留期間の、加害者へのアプローチも先駆的で積極的に試みています。



宮城県からの委託事業には、講座名に予防を入れて DV“予防”啓発講座としました。4年目になり、場所も対象も変化させています。昨年度からは、場所を子育てセンターで行うこともしています。子育て講座に DV と性暴力予防（子どもへの教育）を入れて伝えます。地方には保健推進委員という方々もいます。その方たちの研修会に組み入れてもらいます。主題は“女性の心と体” 無論、DV、性暴力が入っています。対象の方たちの学びたいことの中に、DV と性暴力を組みこんでいます。すべての人にとって、重要で身近な問題だからです。例えば、子育て中の人が 20 人集まったら、1 人は DV で悩んでいる方がいます。実際、講座後に相談につながる人が多々います。

ＤＶは子どもたちの問題

私がいつも話すことは「DV 問題は女性だけの問題でなく、子どもたちの問題です」。DV の中に放置された子どもたちは、多くの問題を引き起こしています。無論、加害している男性の問題でもあります。 殺人して刑務所に入る、それも多いなる税金の出費です。殺人など重大事件が起きれば、関連部門に多くの出費がかかります。次世代にも問題を残します。DV や性暴力を止める、予防することが大事です。あらゆる年代に理解されるために紙芝居もたくさん作りました。

赤いパンフレット

仙台市の性暴力予防の赤いリーフレットは、16 年間小学校 1 年生全員に配られ続けています。あれだけでもかなりのことが伝わります。しかし、DV・児童虐待の環境で育ち、学校に来なくなる子どもたちがいます。ですからリーフレットで学んだ人が伝えることが大事です。「NO・GO・TELL. グッドタッチ、バッドタッチ、プライベートゾーン。え、こんなことまだ知らなかったの？これ常識だよ」と、みんなが言えるようになることが目標です。

お節介な人を増やす

DV 予防啓発講座では、実際起きた事件のことを伝えます。「あなたが背中押さないと被害者は救われない。お節介な人が動かないと世の中は変わらない。自分はハーティの代表を知っているよ・・とか、役所の相談員を知っているよ・・と話すことで、足がすくんでいた人が少し動きます」「NPO 人権活動は、もともとお節介の人々の活動です」と話します。すると講演後の感想文に「私もお節介します」「施設のトイレに DV チェック表おきます」と書いておられます。

加害者は被害者でもある

子どもたちに性暴力のことを教えることは、かなり重要です。男の子も女の子も加害行為をしている人は、被害体験を持っています。暴力の連鎖を止めるのは、子どもたちへの教育、これが重要と思っています。

ノルウェーの教育の神髄

震災後に、ノルウェー国の援助で仙台市からの視察や相互訪問の交流がたくさん行われました。私は今年の 2 月にノルウェーの小学校の教育を参観しました。小学校 4 年生のディベートの授業を副校長先生が見せてくれました。グループに分かれて話し合う。リーダーには「発言しない子がいないようにしよう」と促す。ある子が乱暴な発言をしました。すると「相手の尊厳を傷つけるようなことを言っちゃダメだよ、相手の尊厳を傷つけないように自分の意見を言おう」「相手のグループの主張の、いいところも考えてみよう」と声かけするのです。どのようにして人権意識が育つか、ノルウェー教育の神髄を見たという感じがしました。

小学校には“仲良しリーダー”がいる。選挙で選ばれる役です。オレンジのベストを着ています。休み時間にぽつんとしている子がいたら声をかけるのです。子どもたちの遊びのリーダーもする。孤立している子がいないように気配ります。この役は名誉だそうです。また、1 年生の男の子にはその子の係の 6 年生のお兄さん、女の子には係りの 6 年生のお姉さんが決まっていました。

みんなで議論する教育

子どもたちは、指を一本立てて手を挙げます。これは「意見があります」という意味。指二本立てたら「それに付随して話したい」です。指三本は「質問があります」と言う意味です。子どもたちの、積極的に発表する姿勢がすごい。

ノルウェーは、物事を決めるまですごく議論するのです。だから町の大きな公園や施設のことも「あの出来事は、一体どうなったんだ？」と思うほど時間がかかりなかなか決まらないそうです。しかし、市民の声（当然男女）、子ども、障がい者、老人、LGBT などの、あらゆる人々の声をていねいに聞き、充分に議論して決める。トップダウンで決まるのではないので、結果は良いものができるのです。

ノルウェー王国視察研修 2016

訪問インタビュー

2 宮城・南三陸町

大森つや子さん

プロフィール

南三陸で生まれ育ち、神奈川県の小学校で教師として勤務した。退職後は故郷に帰って家を建て、のんびり過ごしていた矢先に津波に襲われ 4 年間暮らした自宅は全流失した。
避難所運営で役立ったのは日頃、学校で役割分担、情報共有していた実践だった。平成 23 年(2011 年)秋に、仮設住宅に入居後、半年ぐらいの時に被災した女性たちが生活する心の支えとして立ち上がったミシン工房の仲間に入れてもらった。手作業をしているときは失った物を思う嫌な気持ちを忘れさせてくれた。

日時:平成 28 年(2016 年)7 月 3 日
場所:大森つや子さんの自宅

津波に備えての準備

私は南三陸に住んでいたけど出稼ぎで神奈川県の小学校で教師していたの。老後は南三陸でと思って帰ってきて震災に遭った。

今までに宮城県沖地震の報道はよく聞いていたし、海側だから津波がくると危ないっていうのも知っていた。そのための防災グッズ(ラジオ、懐中電灯など)の準備はしてたけど、いろいろ考えると冬か夏によっても準備する物が違う。究極、必要な物は下着だった。下着さえあればなんとかなる。洋服はそのまま着ていてもいいかと思って、下着を巾着に入れて家のあちこちに置いていた。ベッドの下にはスニーカーを置いて、いざとなればすぐ逃げられようシュミレーションをしながら用意はしていた。

生ウニ

3.11 当日

地震がきたのは湾を散歩している時だった。宮城県沖地震がついにきたと思った。大きな揺れで家には入らず、すぐ山の上に向かおうとしたが、私の家の向かいに30 代ぐらいの男性が家に引きこもっているのは知っていたから、その人はほっとけないと思って声をかけて弟たちの家族と一緒に 30mぐらいの高台まで逃げた。高台から見ていると木造の家がガタガタではなく、すごい横揺れで竹のようにしなった。ガラスが割れたり、瓦が落ちたりすることはなかった。家の中がどうなってたかはわからないが、まさか家がなくなると思わないから、後で必要な物を取りに戻ろうと思ってた。

津波到来、すべて流される

そしてついに 30 分近くたって波が来た。引き潮は湾の半分ぐらいで、いつもよりちょっと引いたかなって思うぐらいの程度だった。はじめは大したことがないような気もしたが、すぐにすごい早さで津波がきた。家がねじ切れてあっという間に渦を巻くようにそのまま家が流され沈んでしまった。その状況を村のみんなで見ていた。村の半分、35 軒が消えるのに 5 分もかからなかった。

何が何だか訳がわからなくなった。雪は降ってくるし、寒くて村の半分は流され、高台にある家が半分残っただけ。もう家はないし、寝るところもない。とにかく残った家に分宿した。泊めてもらうところがない人は大工さんが作業する倉庫で一夜を過ごした。隣村は 105 軒あったが 102 軒が全滅で 3 軒しか残らなかった。

ライフラインが跡絶える

電気、水道、ガスも何もない。電気がないから炊飯器でご飯は炊けない。家が壊れたり、がれきが重なったりして、気仙沼方面の道路は陥没して通行不能になり、どこへも行けず孤島になった。ライフライン復旧まで 4 ヶ月はかかった。それまでは川の水を飲んだり、みんなで工夫して過ごした。プロパンガスはあるだけは使えた。とにかくある物を使って生き延びた。今は林道をほとんど使わないから年寄りに聞いてその道でアリーナまで行って私たちが生きていることと、物資が届いてないから救援物資をもらいにいった。今なら 10 分ぐらいで行けるのに、その時は 1 時間半ぐらいかけて行った。通れないところは田んぼに流れてきた畳をみんなで敷いて道を作って林道までいった。

大森つや子さん

避難所で自然発生的に組織づくり

多くの若い人は村を出て働きに行っている。だから漁師をしている人、動ける人、男の人が中心になって、まずは、安否確認のために捜索隊を作った。消防団を母体にして動ける人が手伝った。道を作る、がれきをどかす、その時のリーダーは特に決まっていなかった。そのうち区長さんを中心に行政区の三役が当たることになった。私も庶務ってことで、平時であれば年に 1 回の総会の司会やレジュメを作ったりが私の仕事だったが、今はそんなことを言ってられず、安否確認をして、組織を自然発生的に作っていった。田舎の人はそういうときは強い。

自分の立ち位置

後で思うと私はちょうどいい位置にいたと思う。村は代々引き継いでいる、あの人の言うことは聞かないだろう、ここの家はどうのこうのって、いろいろある。そういうのを何代も引きずっている。いいところもあるけれど、つまんないこともある。私の生まれはここだけど、長い間ブランクがあったから、そういうことを知らん顔してやった。誰と誰がどうのこうのは一切関係なく遠慮しないで言わせてもらった。私のことは〇〇の娘ってわかっているから村の人も話を聞いてくれるけど、ボランティアみたいな人が入ってくると「何言ってんだ！」ってことになる。みんな言いたいことはいっぱいある。だけど知らん顔をしてやったらそれがすごくうまくいった。

それぞれの役割にリーダーを置く

消防団を中心に捜索隊とか、平時であれば婦人消防団も役割分担がすぐにできるけど、炊飯器がなかったからご飯が炊けず、機能しなかった。何かあったときに相談できる生活センターも流された。何もないところでどうするかはその場でやっていくしかない。釜を持ってる、薪がある、ストーブがある、米があるなどみんなで出し合ってやれることをやった。炊き出し部隊のリーダー、看護師さんもいたから保健衛生班とか、病人がでたときどうするかってリーダーを決めて組織を作っていった。それがとっても大事だった。

物資が届く

5 日ぐらいすると物資が入ってきた。東京の八王子から福島が通れないから新潟経由でボランティアさんが車で物資をもってきてくれた。どこが一番困っているかではなく、行き着いたところにもっていく感じ。大きいところは物資が行き届いている。役場からも「必要な物は何か」と聞いてきたので毎日書いて申し込んで定期便ができるようになった。軽トラにガソリンはくれたが必要な物を書いてもこない。ある物だけをよこすだけ。なければ繰り返し申し込む。発注したり、まとめたりして全体を見ていた。

物資の配給について透明性を高める

物資は配給制。それが一番の問題だった。みんな運命共同体だから、最初は村の家にあるものを食べた。それも尽きてくる。

今まで近くにお店がないからみんな大きなストッカーに 1 週間分まとめて買い物をして魚などの冷凍食品や調味料はストックしている。電気が使えず冷凍食品が溶けてしまうからそれを先に食べて命を繋いだ。また物資の配り方は透明性を高めた。それがもめ事の一番になるから。よそでは顔見知りだから「もっていきな」とか、こっちの人には知らん顔をするとかで不平不満がいっぱいだったと後になって聞いた。私たちはマックス 300 人までになった。家が全滅した隣村の人も来た。とにかく交通手段がないから人のいるところにみんな集まってきた。300 人もいるのに卵 2 パックとかがくる。それをどうやって分けるか、早く分けないと腐ってしまう。そういう時は瞬時に判断をする。80 歳以上の高齢者がいる世帯に卵をあげて、後で「あげました」とみんなに報告をする。お菓子がきたら、「子どもがいる人を中心に先にあげます」と言っておく。数がある物はみんなに平等に渡した。1 軒の家に今日の物資はこれだけですってみんな書いて、ティッシュペーパーは 1 軒に 2 箱、歯ブラシは家族分、歯磨き粉は 1 軒に 1 個を瞬時に決める。1日配るものはバナナ1本だけということもあった。

グループづくり

当番を決めて 40 グループの名簿を作った。二人暮らしで家が大きいから 20 人もお世話になったとかもあった。だいたい同じようにして、後は人数割りで「人数が少なくなった場合は報告してください」とみんなに声をかけてきた。

毎朝のミーティングで情報共有

毎朝大工さんの倉庫に集まって必ずミーティングをした。それぞれのグループから現状を報告してもらう。人を探しているとか、道路がどうなったとかを係が報告する。

自分だけではできないとわかってるから、区長にも相談しながら、みんなに任せながら任せっきりにはしないで報告はしてもらうわけ。情報は全員で共有する。だからいろんなことを言っていた人が言わなくなった。言ったらその時は「はい」って聞いておいて、次の日の打ち合わせで「こういう意見が出てますけどみなさんどうでしょう」って報告する。みんなが言う前に「私はこう思う」って言うの。他のことは言わせない。それを 3 回ぐらいするとあきらめて何も言わなくなった。いろんなことを言われてもできない。係を決めて、係で困っていることはないかを報告してもらった。

声を出すことの大切さ

そしてやっとボランティアの人が乗用車に防寒着や、トイレットペーパーや調味料積んで届けてくださった。今何がほしいか、料理をするのに何が必要かを聞いてくれて、内陸のほうに買い出しに行ってくれたりもした。国道沿いの大きな所へはボランティアが入っているけど、私たちは忘れられたというか、気づいてもらえなかった。だから国道に大工さんが作ってくれた看板に「水、カップラーメン求む」って書いて出した。するとボランティアさんがいっぱい寄ってくれた。だから知らせなきゃ、声を出さないといけないんだということに気づいた。顔を見ただけではわからないから、声を出さないと改めて思った。

一人で抱えこまない

一人の力は知れている。とにかく抱えこまない。私は一人では何もできないからみんなにお願いしてみんなでやってきた。これは誰に頼めばいいかという私の人材バンクにはいっぱい登録されている(笑)。

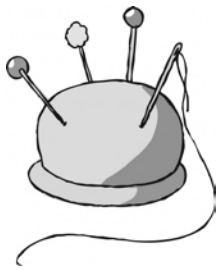
みんな垢だらけで太陽に向かってミーティングをしているから日に焼けて肌ががさがさして、お風呂にも入ってないし、眠れない。ハンドクリームとかは一番遅かったかな。化粧よりも荒れてぴりぴりして痛い。とにかく栄養も足りてない。あの頃は 8 キロぐらい痩せたから膝の痛みが取れた。生きるのに必要な食べものは少なくていいと思った。今まで余分なものをいっぱい食べてたなとすごく感じた。体育館には一度に物資がまとまって届くけど整理整頓ができないし、うまく分けられない。そのうちに腐っていく。うまくやるのは難しいと思った。

お風呂に入る

やっと自衛隊が作ったお風呂に行けるようになった。歩ける人は自衛隊のお風呂を利用してもらった。風呂に行けないひとは漁業で使う 1 トンタンクをおいてポンプで川から水をくんでお湯用、水用に分けて、船で使っている電熱器を水の中に入れてお湯を沸かした。大工さんが作ってくれたすのこを敷いてかけ湯をした。風呂に行けないじいちゃん、ばあちゃんはすごく喜んでくれた。他に道路が通れて、ガソリンがあれば温泉にも行けた。被災してから 50 日間働いてきた。

仮設住宅入所を待つ

それから仮設を 3000 戸作らないといけなかったのに 30 戸ぐらいしかできていなかった。私もなかなか当たらなくて。間借りといっても気を使うし、食べるものもなくなってくるしと思っていたときに、政府が「3 月末からライフラインのある所で心と身体を休めてください」と言って旅館とか、○○センター、空き部屋のある学校とかを手配してくれた。そこへ移っていった人もいた。あらかた目途が立ってきたので、家がない人は温泉や学校に移って仮設が当たるのを待った。私は最後の募集にも落ちて、鳴子温泉の旅館を政府が貸し切ってくれたので、そこで 3 ヶ月間 10 畳の部屋に知らない人 4 人で分宿した。この時は期間が長かったから大変だった。でも私はのん気もんだからそこで縫い物でパッチワークをしたり、つるし飾りを教わったり、針仕事を教えてもらいながら楽しくやってきた。



すべての財産をなくす

南三陸町からも 1000 人ぐらいの人がそこで仮設ができるのを待った。ボランティアも来て物資も回り始め、道路も少しずつよくなってきたけど、仕事も財産もみんななくした人もいる。弟も 2 億ぐらいの財産をなくした。船は家より高い1隻 5 千万とか大小併せて 6 船ぐらいは流され、いけすの魚も出荷目前で流された。だからみんなボーッとしてた。働いている人たちはローンも残っている。でも私が失ったのは家だけ。家は流されても年金だけは確実にもらえる。だから嫌みも言われた。

町の様子

私たちの行政区は 35 軒流された。ここに移ったのは 14 軒。あとはみんなバラバラになった。南三陸町はどんどん変わっていくし 17500 人ぐらいいたけれど今は 13000 人ぐらい 4000 人ぐらい人口が減った。亡くなった人は 800 人ぐらいいる。

仮設住宅入所

やっと仮設に入居できたけど広さは 4 畳半。昭和 20 年（1945 年）頃にできた法律に基づいて大人 4 人で 4 畳半 2 つなの。今まで大きな家に一人で住んでいたりする人たちが 4 畳半に 2 人で住むことになった。だからすごくみんな困っていた。私の部屋も台所の前にトイレと風呂がある 4 畳半一つの上、鉄板だから外の暑さ寒さがダイレクトにくる。食べるのも、寝るのも、仕事をするのも、本を読むのも同じ部屋で 4 年暮らしてきた。

ミシン工房スタート

私は仮設がすごくいやだった。だから仮設での生活の時にミシンで手作業ができるようミシン工房に参加させてもらった。そうでないとあそこにこういうのがあったなとか、失った物を数える。何十年かけて集めた物とか本も何千冊も全部流したし、あの本もあった、この本もあったってね。そんなことばっかり思っているとほんと嫌になる。ミシン工房ができてからは作ることが楽しくて、忙しかったから失ったものを忘れることができた。私たちが最初に作ったポーチは宮本亜門さんの紹介で銀座の新橋演舞場で売ってもらったら完売した。それが始まり。

漁業の仕事が復活

それからみんなが仕事に復帰して、わかめとかの漁業の仕事を手伝いだした。お針子さんは 1 日 1000 円だけど、わかめの仕事は結構なお金になる。わかめをしている人は 1 年分を 3 ヶ月で稼ぐからその期間は午前 3 時に起きてその期間だけはすごく頑張るの。わかめは浜でボイルして、塩をまぶして、茎を抜いて加工するの。ホヤとかホタテとかも。それを家族でやっている。

今やれることをやる

今は家を建てていつも開けっ放しでワンルームにしてるの。今でも細々とポーチを作っている。売れても売れなくてもいい。今はこれしかないから続けている。「今やれることをやる」ことが私のモットーなの。

訪問インタビュー

3 宮城・気仙沼市

吉田瞳さん

プロフィール

気仙沼市男女共生推進室勤務。津波により職場フロアが浸水し、書類やパソコン等が使用できなくなった。吉田瞳さんは、家族（両親）の安否が不明なまま避難所の運営にあたり、無事が確認できたのは 5 日後だったという。市職員の夫と自宅を片付けに行けたのは 4 月 3 日だった。「風呂に入れたのは 20 日後でした。私には更衣室の必要もなかった（笑）」と、昼夜問わず住民対応や避難所対応に追われていた当時を振り返る。

日時：平成 28 年（2016 年）7 月 3 日
場所：気仙沼市役所会議室

気仙沼市避難所の状況

最大時に 105 か所もあったという避難所の状況について、ほんの一部ではあるが男女共生推進室が避難者の運営に当たった職員から聞き取りした内容をまとめた。避難所への通信手段が回復する頃には、避難所それぞれの運営スタイルが定着していた。

更衣室や女性用物干し場は・・・

・収容人数を超える避難者を受け入れたため、更衣室を用意できない避難所では布団の中で着替える、トイレや空き教室で着替える等していた。

・体育館の用具室を更衣室とし、「使用中」の札を作って使用していた。

・空き教室を更衣室とした。学校再開後、校舎から体育館に移ってからは支援によりいただき，アリーナ内に設置したテントの一つを更衣室とし、座卓やドライヤー、鏡等を置いた。

・廊下にまで避難者がいたので更衣室を用意できなかったが、落ち着いてから物置を改造して更衣室とした。間仕切り等は学生ボランティアが段ボールで作成した。

・ボランティアが段ボールで更衣室を作成。のちにテントも更衣室とした。

・水道が回復した後、各避難所に洗濯機が設置されたが、避難者 100 名を超える避難所でも当初は 2 台程度だったためローテーションで使用し、下着等は手で洗った。その後、状況は安定すると洗濯機の数も増える等、生活が改善された。

・洗濯機は何時～何時は何班と決められたので仕事をしている人は手で洗った。

・物干し場も不足しており、誰でも出入りできる場所のため下着を盗まれた女性もいた。

・下着は上着で隠すようにして干した。

・体育館 2 階にある用具置き場の小部屋に女性専用の物干し場を作った。スタッフも含めて男子立ち入り禁止にした。

・当初から男性・女性のスペースを分けて避難者を収容していたところもあった。

子ども

・子どもが夜に泣く、騒ぐ等で周囲から苦情を言われ避難所を出るケースもあった。
・幼稚園の園児とその親でグループをつくり、夜泣き、話し声もお互い様と円満に過ごしたところもあった。間仕切りが支給されたがあえて使用せず最後までグループとして過ごした。
・授乳を男性に見られるというセクハラ行為があった。
・夜間、避難所を出て車で授乳する母親もいた。

運営リーダーの男女比

・男性より少ないが女性のリーダーもいた。
・約半数が女性リーダーだった。
・リーダーに女性はいなかった。
・班を作らずみんなに呼び掛けて協力者を募るスタイルを取っていた。
・実質的に女性がリーダーとして動いていても、代表者の名前は男性にするケースもあった。(気仙沼の特徴。女性は出しゃばりと思われたくない)

ニーズの把握

・毎日(当初は日に 3 回)、リーダー＆運営スタッフ会議を行った。
・本部に直接ニーズを伝えてもらった(職員と顔見知りになっていたので言いやすかった)。
・本部には保健師、緊急雇用の女性臨時職員等女性が必ずいるようにし、言いやすい体制とした。
・女子トイレ、更衣室等に女性特有のもの(生理用品等)を置いて、男性職員に言わなくてもよい仕組みづくりを心がけた。

支援とニーズのミスマッチ

・避難所には多くの支援物資が届いたが、ニーズと合わないことも多かった。
・下着はMサイズ、ブラジャーはフリーサイズのスポーツタイプが多いが、実際にはL、LLサイズを希望する人が多かった(特に年配の方)
・生理用ナプキンは多くあるが生理用ショーツがなかった。
・粉ミルクはあるが哺乳瓶の数が足りなかった。

吉田瞳さんと熊谷政弘さん(市職員)

気仙沼市の被災の状況

〔平成 28 年 5 月 1 日現在〕
死者数　1,042 人
行方不明者数　220 人　(警察発表)
人口増減　▲7,643
(平成 23 年 2 月末:74,247 人
→平成 28 年 2 月末:66,604 人)
世帯数増減　▲366
(平成 23 年 2 月末:26,601 世帯
→平成 28 年 2 月末:26,235 世帯)
津波浸水面積　18.65 ㎢
(浸水割合　5.6%)
被災家屋　26,124 棟
(被災割合 40.9%)
被災事業所数(概数)　3,672
事業所(79.9%)
被災従業員数(概数)　27,736 人(82.5%)

生活に関すること

・調理設備のある避難所では避難者が交代で食事を作っていたが、その役割は女性に偏りがちであった。
・男性を含めた班で行っていた場所もあったが、男性が仕事に行き始めると食事の用意が女性の負担になった。
・仕事や体調不良等の理由で食事の用意に関われない方へ配慮していた。
・女性の役割負担は調理だけでなく掃除も同様だった。

ＤＶへの対応

・夫と別居しているDV被害者からの要請により、避難所の名簿から氏名を削除した。
・被災していない世帯のDV被害者の安全を確保できるまでの間、警察の依頼で避難所に滞在させた。名簿に氏名は載せず親族からの面会も警察同行以外は断る体制とした。

障害者への対応

・和式トイレ数個を被せるタイプの洋式トイレにした。
・身体を拭く際に更衣室を使用した（総合体育館）。
・専用の部屋を作り、スタッフが一人付いてトイレ等に順番に連れて行った（総合体育館）。

外国人避難者への対応

・日本人配偶者等家族と一緒の外国人の方、日本語に不自由のない方が多かったので特別な対応はしていない。
・企業で働いている中国の方々は日本語が不自由だったが、数日のみの滞在で本国に帰国したので特に何もしていない。
・日本語が不自由な中国人が 10 数名いた小規模避難所からの要請で辞書を用意した。

二次避難所

・気仙沼市内の二次避難所（ホテル）については基本的にホテル側で対応した。
・市内の旅館の避難所には市職員が定期的に訪問した。
・宿泊施設の部屋に世帯ごとでの避難だったので更衣室や物干し場の要望はなかった。
・市内ホテルに避難している乳児を育てる母より「一次避難所ではオムツやミルクがもらえた」等の相談を受けて職員が届けた。
・そのほか、支援の化粧品や下着等も二次避難所に届けた。

ＤＶ等相談の増加

震災後、女性相談に寄せられるDV相談が増加している。

「被災により仕事を失い、生活が苦しい。そのストレスからか、暴力をふるわれるようになった」「震災前は家が広く庭もあって物理的に距離を置くことができたが、震災後は狭い仮設住宅の暮らしにより逃げ場がなくなった」「震災により、仲裁、支援していた方が死亡・引越し等でいなくなったことにより、DVが激しくなった」等、住宅事情や生活環境の変化により暴力被害が表面化したと考えられる。

また、生活支援員等の支援者が仮設住宅等を訪問したことにより、（支援者の気づき、被害者からの相談により）DVが発覚して相談につながったケースもある。関係機関との連携が進み、見守りや状況確認のため、こちらから連絡を入れる場合もある。

DVに対する理解が進んだ結果として「これはDVだ」と気づき、内閣府相談事業、パープルホットライン等、様々な相談窓口が開設され、紹介されたことによって相談に行くことへの抵抗感が薄れて行きやすくなっていることも相談件数の増加につながっていると考えられる。

精神疾患を持つ方の相談が深刻化、長期化し、一度の相談で終了せず継続するケース、高齢者や孤独を感じる方等が自分の心の整理や気持ちの安定のため、折々に相談を利用するケース等が増えていることも相談件数の増加につながっている。

昨年度より広域ネットワーク間の勉強会や訪問事業に取り組み、県をまたいだ相談や情報提供を行っている。
今後、DV相談、女性相談の増加に対応できる窓口の充実を図り、関連機関と連携しながら情報提供の充実・強化に努めたい。

☆DV等相談件数（年度別）

年度 / 相談件数	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
男女共生推進室受付　件数	28	25	28	42	40	124	183
関係機関からの情報提供等を含めた件数						186	245

※DVの他，親子・職場の悩み等の相談も含む

震災と市職員

震災発生直後から被災した住民対応にあたったため、被災した職員も自身の住居確保や生活のために動くことはできなかった。そのため家族から責められた人もいた。

発災から少し経った頃、「自分は子どものために水の 1 杯もくんでやれなかった。水や食料の調達も全部妻に負わせてしまった」「行方不明の親せきを探しに行きたかった。あんなに可愛がってもらったのに」と話してくれた職員もいた。

支援物資は優先的に住民に配布し、被災した職員は周囲の視線が厳しく支援物資を受け取ることはできなかった。

被災した職員もいたが、震災対応中は「被災者」ではなく「市職員」として住民や支援の方々に対応し、激しく非難されることも多かったので連日の超過勤務と併せ、肉体的・精神的に追い詰められていた。

「人殺し」「お前らはどうせ給料もらっているんだろ」と言われたこともあった。

震災発生直後から様々な震災業務に携わってきた気仙沼市職員もまた被災者である。災害ストレスの影響を受けて苦しみ、先の見えない不安を抱えている。公務優先で懸命に地域対応、住民対応にあたってきた職員にとって、住民の方からの非難や苦情を黙って聞き続けたことほど辛いことはなかったのではないだろうか。今後も復興の牽引的役割を担う職員が十分に震災業務、通常業務に専念できるような環境が何より整備されることを心から願う。（文責：森）

訪問インタビュー

4 宮城・大島

小松万里子さん

プロフィール

東京都府中市出身、夫とは大学の「躰道（たいどう）」のクラブで知り合い結婚。夫は会社員で最初は転勤族で転々として暮らしていたが、平成 16 年（2004 年）、夫の実家の家業を手伝うために大島に来ることになった。慣れない四世代家族での暮らしで、子育てをし、大島の嫁として葛藤していたなか、震災に遭う。避難所、仮設住宅の生活をしながら、大島に来るボランティアの力を借り、夫とともに家業を再開させる。現在、地元の子どもたちに夫婦で「躰道（たいどう）」を教える活動を続けており、いい成績が出始めている。

日時：平成 28 年（2016 年）7 月 3 日
場所：民宿「海鳳」の一室

女性と中学生で消火活動

震災前はフェリー船着き場のある浦の浜から亀山山頂まで亀山リフトがありました。一人乗りで、ベルトもないリフトでしたが震災で下は流され、上は焼けて撤去されました。

震災の夜、気仙沼市内の大きな石油タンクから流出した重油が燃えて海の漂着物に引火し、大島に流れてきて木々に燃え移りました。下草がじわじわ燃えるように広がり火の手は亀山の山頂まで上がりました。島の男の人は船に乗っているか、町に働きに出ている人が多く、島にいた数人の男性と中学生の力で消火作業を行いました。次の日は煙が上がって、地獄絵図みたいで怖かったです。5 日目にようやく沈下しました。家は、母屋の 2 階の肩の高さまで水が来ました。翌朝、様子を見に行くと、家はヘドロでドロドロで、和室の畳は持ち上がってぐちゃぐちゃになり、平屋の屋根は庭に落ちていました。

実家と連絡

保育所に衛星電話があり、震災 5 日目に府中の実家に電話したら「生きていたんだね」と泣かれました。テレビで「亀山では火災で 50 人が死亡」と出たためにとても心配していたようです。地震直後、私の電話はつながっていたし、震災の報道も情報も入ってこなかったので、実家で心配されているような状況になっていると思っていませんでした。

避難所の生活

私たちは、学校がいっぱいだと聞いたので開発センター（小さな体育館のあるセンター）に避難しました。そこで 3 か月間暮らして子どものお誕生日もお節句もしました。当時は 200～300 人避難していました。

第 2 次避難所の手続きの時に夫の祖父が避難所の生活で肺炎になり入院したので、2 次避難ができませんでしたが、開発センターは他の避難所より恵まれていたと思います。離島なので各家に魚や食料を保存する大型のストッカーがあったので、停電で電気が切れても順番に食べれたし、被災していない人からいろいろ手助けがあってひもじい思いをしたのは最初の 1 週間で（その後）支援物資もきて床屋さんのボランティアさんにカットもしてもらいました。

小松万里子さん

仮設住宅の生活

仮設には 3 年いましたが、ほとんど知った人ばかりで過ごしやすかったです。小さい子もいたのでいっぱい助けてもらいました。

仮設住宅は人数によって間取りが決まっていました。祖母と両親と自分たち夫婦と子どもの 6 人なので、4.5 帖 2 部屋と 6 帖 1 部屋とキッチンの 3K でした。祖母が 1 部屋、両親が 1 部屋兼居間で、食べる時はテーブルを出し、寝るときは片付けて布団を敷く。そして私たち夫婦と子どもが 1 部屋でした。

2 年過ぎた頃、この生活のストレスが爆発して子どもを連れて家出をしたこともありました。

仮設住宅に空き部屋が出始めたので、同じ棟の空いている部屋を借りたら下の子ができました。なかなか子どもができなかったので諦めようとしていたので嬉しかったです。

一昨年 8 月、下の子が生まれる1週間前に仮設を出て今の家に移りました。自分達はたまたま土地があったので家を建てることができましたが、今現在も、大島の3か所を合わせて10軒ぐらいの方が仮設で暮らし、防災のための集団移転事業によって住宅ができるのを待っています。

ヤマヨ水産の牡蠣

家業を再開

津波で持っていかれた漁船が気仙沼市内の工場の屋根の上に乗っかって、ほとんど無傷で見つかりました。夫は家業を続けるかどうか悩んでいましたが、船が見つかったことで再開を決めました。

結婚した時は会社員で転勤族でしたが、1 年後の平成 16 年（2004 年）、家業を手伝うために大島に来ました。元々実家から出て一人暮らしをしていたので、母親はそんなに心配はしていなかったと思いますが、父親は心配していたようです。

新潟県長岡市から大島に来たのが中越沖地震の 2 週間前だったのにはびっくりでしたが、今回は大島で震災と津波に遭いました。

家族のこと

義父は、知らない人でも観光客でも、見かけた人は誰でも声をかけて家に連れてきます。義母は家娘で、「嫁はこうだ」とか言わず、さばさばした人です。逆に義母の母親は「嫁は玄関から入るな」と言うような人で大島に来たばっかりの頃はよく泣かされました。靴下の干し方が違うからと洗濯物を全部やり直しさせられ、家事全般見られているようで大変ですが、実の娘の義母も理解してくれているので気持ちが楽です。

「大島の嫁」としての葛藤

大島で最初に出会ったのがお向かいのお嫁さんだったため、「大島の嫁はこんなふうにしなければならない」と思ってしまったんです。同世代で家族関係も似ている、家に尽くす、親の言うことに逆らわないという人。子どもができて保育所に行くようになると、いろいろな人に出会うので「これは、違うな」と思いました（笑）。でも初めにこの人と出会っていたから、この島で嫁としてやってこれたのかもしれないと思います。

夫との出会い

夫は大学の同期で、出会いは「躰道（たいどう）」のクラブで 4 年間やってきました。流されやすい自分と比べ、夫は1本筋が通っていてブレないところがすごいです（それが良い時も悪い時もあるのだけれど）。夫婦で島の子どもに「躰道（たいどう）」教えて10年、その結果が出てきて全国大会にも出るようになりました。島は習い事が少なく選択肢あまりありません。子どもたちはみんな素直で一生懸命やってくれています。

ボランティア支援について

ボランティアの高校生達

「最近、表情が変わってきたね」と言われますが、それはもっともなことだと思います。はじめの頃はいろんな人がいっぱい来てくれるけど、どう接してかよいかわからなくて戸惑っていました。ー何も持たず、食べ物もなしで来る人もいる、ここはコンビニもない、交通手段も何もない、タクシーもいつもあるわけではないし、バスも少ない、それでも家に来たいと言われたら船着き場まで迎えに行って、お昼になったら昼食を用意するーというように家の中がバタバタするので、どんな気持ちで来ているのかなと疑いの気持ちを持つこともありました。

ボランティアの方々のおかげで子どもたちは日常を取り戻すことができ、自分自身も受け入れられるように変わってきたと思います。手がかかることもありましたが、助けに来てくれたことに感謝しています。

浦の浜にて

訪問インタビュー

4 宮城・大島

白幡てるみさん

プロフィール

大島で生まれ、大島で育つ。21 歳の時、同級生だった夫と結婚し民宿「海鳳」を営む。小さいときから津波の怖さを教えられて、被害を受けてもたくましく立ち上がる大人達の姿を目にして育つ。常に防災意識をもち、3 月 11 日、地震直後も冷静に隣近所に声をかけ、気になる高齢者を助けに回る。震災後、ボランティアの宿泊をいち早く受け入れお世話をし、現在、老人クラブのマドンナ的存在、元気で明るく周りを楽しくさせてくれて、宿泊客へ語り部として震災の事を伝える活動をしている。

日時：平成 28 年（2016 年）7 月 3 日
場所：民宿「海鳳」宴会場

震災に対するこころ構え

その日、私は自宅にいたもんですから、この世の終わりかなと思ったんですよ。
私ここで生まれてここで育ったんですよ。津波は経験していますしね。やっぱり、自然災害というのはね、避けられない。来たものは来たとして受けいれていかなきゃなんない、クリアしていかないといけないっていうのは、ちっちゃい時から見てるし、そうやってきた大人も見てるしね。まして私の実家は漁業をしていましたのでね、だいたいこういうときに津波がきたらこれくらいの被害があって、それでも自然の力を借りてもとの状況に戻していくんだということを見て育ちました。

サイレンに勇気づけられる

小松さんもそうだけれど、海の仕事している方は、ゼロでなくてマイナスの状況になっているわけです。そう思いながらも、「このままではないんだな」「元に戻るんだな」と思う自分がいてね。だからサイレンが鳴ると、ウゥーっていうサイレンに自分だけじゃないっていうか、この辺一帯みんなそうなんだということで微妙に力づけられることもありますね、正直なところ。

防災訓練どおりの津波

20 年前から防災マップっていうのを作ってるんですよ。うちの地区は田中浜の地区のあの周囲、上のほうなので、10 メートルの津波の避難訓練もしてたんです。昔の人は絶対この辺までは津波はこないって言ってたんですけどね。でもこの東日本大震災は、マップのとおり津波があがりました。「東北地方に大きな揺れがありました、6 メートルの津波が想定されます」の放送を聞いて「6 メートルなんかじゃない、10 メートル以上くるな」とホントに私そう思いました。

白幡てるみさん

家族の安否確認

うちのお父さんは気仙沼側にいて、15 分くらいたったころに携帯に電話が入って、「大丈夫か」「大丈夫だよ」それで切れて。生きてたことが確認できたのは公衆電話なんですよ。公衆電話がだいたい一番最後まで通じるんです。大きい方の娘は大島汽船に勤めていて、その日は大島側にいたんですよ。なんとか 25 分の時間があるから逃げれるかな、2 時 10 分に出る船があるから到着する時間に重なるかな、でも船の方が速いかな、だからなんとか逃げれるかなと。二番目の娘は大谷海岸の販売所に勤めていて、前日の夜家に泊まったんですよ。その日の朝も地震があったんです。だから、「今日地震があったら津波が来るかもしれないから農道逃げなさい」って言ってやったんですよ。そしたらホントに来たのね。

3 年過ぎて実感

大島でも 13 人くらい亡くなったけど遺体が上がんなかった人がいるんです。あんまり亡くなる人多すぎて実感がわかなくって涙が出ないんですよ。淡々としてる感じ。自分だけじゃなく辺りもみな同じような状況なので、何となく 3 年過ぎた頃やっと「亡くなったんだなあ」と。隣のじいちゃん、ばあちゃんも午前中に回覧板を持ってきたりしてたもんですから、いまでも回覧板が届くと、なんかそのばあちゃんが届けてくれたような感じがするんです。

仕事が出会いを

ただ私の場合はこの仕事をしているので悲しんでいる間もなく、頑張ってくださいというボランティアさんたちがいっぱいお入りになるので、「震災が起きたことはよくないことですが、震災がなければ一生お会いすることがない方にお会いしてますので、それはやっぱり宝だと思います」といつも言うんです。私たちが下向いてるばっかりではね。

ボランティアのありがたさ

同じ状況にある大島の人に手伝ってくれって言えないじゃないですか。だからボランティアさんが毎回慣れない手つきで手伝ってくれるのは、みんなとてもありがたいと思っている。ボランティアさんが帰る時、ありがたくて泣き泣き送っているお母さんもいたし、やっぱりボタンティアの方に手伝ってもらった人は忘れないんですよ。

立場の違いでのストレス

被災地ではあるけれど、被災者じゃない立場の方もいるわけですよ。家が流された方もいるけど、家が建っている人もいる、この紙一重のところが時間がたつと微妙になってくる。「あんたっち流されなくてよかったね」っていう言葉の裏まで考えて人間関係まで崩れてしまっちゃってね。流されたほうではなくて家が残されたほうが精神的にストレスを抱えるんです。今まで隣近所、「まあいいか、こんなところで」と穏便にすませてきたところが表に出てくるんですね。

体育館での出来事

でもやっぱりね、ああいう時だからこそ助け合わないと。みなさん無事体育館に避難しましたが、ちっちゃい子どもたちっていうのは、いっぱい集まっていると何だかウキウキした感じになってキャッキャ、キャッキャやるんだけども、あの時だけはさすがに「静かにするっべね」と叱る人はいなかった。小学校と中学校の先生方は気仙沼側に帰れなくて家族の安否確認もできないまま、一晩中懐中電灯持ってね、じいちゃん、ばあちゃんたちをトイレに連れて行って、断水で流せない水を流してあげて、チリ紙いっぱいになれば交換してあげてみたいな。ふつうだったら、汚いだとかバッチイだとかで手を出さないようなことを当たり前のようにしてくれてね。だからだんだんにね、中学生の生徒さんたちも認知症の人たちの面倒をみてくれるんですよ。今になれば、その時の経験がきっと今後役に立つと思います。

近所の人との関わり

近所の人がね、井戸水をくんで薪でお風呂を沸かして、「あんたとこ、娘さいるからお風呂よこさねか」って言ってくれたの。ありがたいですよね。あのおばちゃんキツそう、何か好かれそうでないっていう人がすごくやさしくてね、そうしてもらえると付き合いも変わりますよね。

外国人から気づかされたこと

実は、1 年過ぎた頃から震災の話しをすると気持ちが 3.11 に戻る辛い時期もあったんですが、ある時外国の方がいらっしゃって堤防のことじゃなくて内面のこと、心のことを聞かれるんです。そして今、震災がきて地震がきたら私たちはどうしたらいいですか、何を持ってたらいいですかと聞かれるんですよね。こういうのは経験した人でなければわからない。こういうのを伝えていくことが大事なことかなと若干開き直りました。

大島は自治会がしっかりしている

そのときの判断、大島は結構よかったんじゃないかと思います。大島は結構物資が来るようになったんですよ。大島は自治会がしっかりしてるんです。たとえば大島に物資が届いたら、体育館に地区の代表が取りにいって地区に戻り全戸にちゃんと分配する。大根1本きたら、「おらほ大根あるからいらね」「おらほ醤油あるからもっていけ」ってなんか融通がきくような物資の分け方がけっこうあったりしてスムーズでしたね。だから気仙沼のほうに行くと、流された地区は他に避難しているので自治会長さんがどこにいるかわからないから物資がきても分けられないのでお断りしてるようなところもあるようなんです。物資配給を断った自治会があるという報道が流れたりしたんですが、悪気で断ったんじゃなくて分けられないんですよね。でも大島はホントにスムーズだった思います。

物資のありがたさ

ほんとに物資はありがたかったですよ。セブンイレブンとかローソンとかほんとにありがたかった。サンドイッチとか来るんですよ、何だか懐かしかった。ああいう時っていつも見ている物が、今まで食べていた物がなくなるじゃないですか。あの時大島はまだプロパンだから米も炊き出ししたんです。ただ山火事が発生したときは消防の方達がプロパン全部外したみたいでしたね。二次災害が起きるということで。全国から物資をいただいてほんとうにありがたかったです。

本土との橋が架かる

今度橋が架かる。今だからよかったかなと。橋がかかる向こう側の道路が海岸線なので、今回の震災で多分使えなかった。今度できる橋は道路が上のほうなのでいいかなと思います。

でも正直言うと船も残してほしいなと。やっぱり体験学習の生徒さんがいらっしゃいますよね、「帰る時に七色テープを引いてお別れしたのが一生忘れられません」と手紙をいただく。その船だけは残してほしい。橋がかかると通過点になってしまって、観光業はつぶれてしまいます。船があっての大島ですから。

震災から５年目

人間はどんな時でも一人では生きていけません。震災から 5 年目になりますが、今でも震災の時のちょっとした思いやりの心が私たちをつないでいます。11 日の夜、食べるものがなくて民宿にその日の午前中に届いた干しイモを少しずつ袋に入れて体育館のところどころに「干しイモで我慢してね」と渡しました。そしたらつい最近、道であったお母さんに「あの時の干しイモの味が忘れられない」と言われました。自然災害に見舞われても私たちはまた立ち上がります。

３．ジョネットサロンの報告

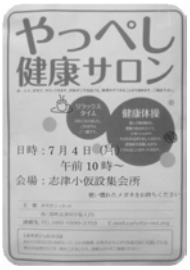
～みやぎジョネットの活動に参加～

日時　平成 28 年(2016 年)7 月 3 日(日)10:00～12:00
場所　①志津川小仮設住宅集会所
　　②入谷中学校仮設住宅集会所
　　③旭ヶ丘地区集会所(南方 1 期 2 期仮設集会所)
内容　・「ジェンダーかるた 2014」（※4）（以下かるた）を使ったワークショップ
　　・親睦会

ジョネットサロンは午前と午後、ほぼ毎日どこかで開催されています。人と人のつながりを大切に日頃は手作業をしながらおしゃべりを楽しんでおられます。今回は、私たちが持参したかるたで簡単なワークショップをさせていただくことにしいました。「大阪の乗り(ノリ)」で作った、若干、過激ともとれるかるたに、東北の、沿岸部の女性たちがどのような反応をされるのか、少し不安な気持ちを抱えたままメンバーは 2～3 人ずつ3か所に分かれて参加しました。

それぞれのサロンでは、みんなでかるた取りをしたところもあれば、テーブルに広げて、中から気になる札を手にとり、ご自身の体験をもとに感想を出し合ったところもありました。女子会のようになごやかに、参加者それぞれが興味をもってかるたを手に取って見ていただけたのは何より嬉しいことでした。「男は仕事、女は家事・育児」といった性別役割分担意識に疑問を持ちながらも、「女はこうあるべき、男はこうあるべき」と性別で分けるのがあたりまえという環境の中で、それを受け入れざるを得ないという状況だということを参加者やメンバーみんなで共有しあうことができました。

南三陸町防災対策庁舎とジョネットハウス



入谷中学校仮設住宅集会所では、医師の検診とお話があるという日に重なり、参加者が少なかったので、かるた取りをせずにサロンに来てくださった方の近況やお気持ちを聴かせていただきました。

震災前は家族でお店をされていた 93 歳の女性。夫婦 2 人で仮設住宅に移った後に夫を病気で亡くし、現在は一人仮設住宅で暮らしながら時々息子さんのお店にも手伝いに行かれるという。

1933 年(昭和 8 年)の昭和三陸地震、1960 年(昭和 35 年)のチリ地震と今回の津波の話をされた 88 歳の女性。自治会長さんが震災で亡くなってしまったので仮設住宅にいろいろな方が集まり、地域がバラバラになってしまったと憂いておられました。

志津川小仮設住宅集会所

3 階建てのビルの 1 階で美容院を経営されていた 60 歳代の女性。ビルは津波で流され、妹さんは友達を探しに

行くと言って別れたまま、帰ってこなかったそうです。住んでいたところは、昔は海だったところを埋め立てて住宅にしたので、やはり元のしっかりした地盤のところまでしか残らなかったとのことです。現在土地のかさ上げ工事が進み、全く変わってしまった町がエジプトになった、ピラミッドがたくさんあるでしょと話されていました。

現在 13～14 世帯が暮らす入谷中仮設住宅は、来年の 6 月にはなくなるとのこと。家を建てたり、子どもと一緒に暮らすため引っ越す方々が増え、寂しくなる住宅に残られている方々の辛いお気持ちはいかばかりかと思わずにはいられませんでした。

旭ヶ丘地区集会所では、かるたでのワークショップをした後、ネッククーラー作りのワークをしました。熱中症で高齢者が亡くなったことから、予防していただくためのものです。

最後に、それぞれのサロンで箕面名物「もみじのてんぷら」をいただきながらのティータイムを行いました。

志津川小仮設住宅集会所では、「5 年が過ぎ被災状態の違いで人間関係が難しくなってきている」、「5 年は長すぎる、もう少し早くもどりたかった」など、精神的に気力が落ちていく様子や仮設に残っておられる方々のつらいお気持ちを聴かせていただくことができました。

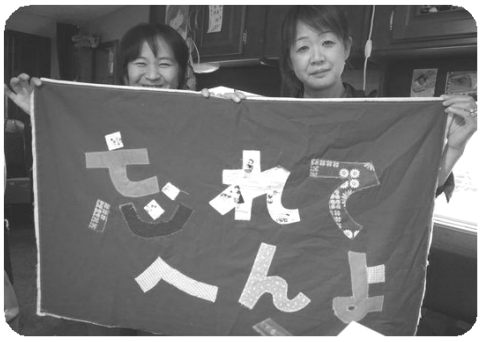
旭ヶ丘地区集会所

ネッククーラーづくりのワーク

「ジェンダーかるた 2014」(※)
社会にあふれるジェンダーバイアス(社会的・文化的性差別あるいは性的偏見)をテーマに、平成 25 年度～26 年度の活動として男女協働参画啓発研究部会が制作した手づくりかるた。表は絵札、裏は読み札とその解説で構成し、遊具としてだけでなく啓発グッズとしても活用できるようにした。

４．付録
スタディツアー旅程表

実施日　平成 28 年(2016 年)7 月 2 日(土)～4 日(月)
行　　先　宮城県仙台市、気仙沼市、南三陸町
主　　催　箕面市人権啓発推進協議会
　　男女協働参画啓発研究部会
参加者　坂口一美、大栗万智子、小川真知子、尾澤るみ子
　　永田よう子、丸岡千香、森幸子、門田加奈



2011 年、みやぎジョネットに贈ったキルト

	日　付	スケジュール
1 日目	7 月 2 日(土)	8：15　伊丹空港出発→9：30　仙台空港到着 11：00～14：30　草野祐子さんからの聴き取りと交流 15：00～16：00　「イコールネット仙台」スタッフからの聴き取りと交流 18：30～21：00　やはたえつこさんからの聴き取りと交流
2 日目	7 月 3 日(日)	10：30～12：00　大森つや子さんからの聴き取りと交流 13：00～15：00　吉田瞳さんからの聴き取りと交流 16：30～19：30　小松万里子さんからの聴き取りと交流 19：30～20：30　白幡てるみさんからの聴き取りと交流
3 日目	7 月 4 日(月)	10：00　みやぎジョネットハウス到着 ～12：00　各仮設住宅サロンで参加者と交流 (「みやぎジョネット」スタッフに同行) 12：00～14：00　鈴木氏からの聴き取りと交流 南三陸さんさん商店街「千葉のり」店で買い物 14：30～15：00　大川小学校跡視察 19：00　仙台空港出発→20：20　伊丹空港到着

石巻市立大川小学校

志津川仮設住宅

第 18 共徳丸

5．編集後記

DV や性暴力被害者支援に走り回る八幡さんの力強い語りは「被害者も加害者も出さない社会を作る」強い信念に貫かれ、アリス・ミラーの名前が出たときは同志を感じました。女性は社会的弱者にされがちですが、知識を持ち、しなやかな強さも持ちたいと思いました。

大栗万智子

坂口さんとジョケンのメンバー“8人の女たち”の2泊3日のスタディツアーは、ものすごく中身の濃い充実したものだった。体験を語ってくれた仙台の、気仙沼の、南三陸のひとりひとりのお顔が思い浮かぶ。仮設住宅のサロンで津波のことを語ってくれた 88 歳の女性は、何度も何度も同じ話を繰り返した。大阪から訪ねて、方言がよく分からないのにうなずいて聞く私は申し訳ない気がした。サロンでの出会いは一期一会で、来年は会えないかもしれない。会えなくても、これからも忘れずにつながっていきたいと思う。

小川真知子

あれだけの災害に遭われたからこそ見えてきたことをたくさん教えていただいた。防災とはどれだけの物を常々準備しておくかではなく、日常の中で人としての人権意識をどれだけ高く持つことなのかと突きつけていただいた気がする。「普段できてないことは、被災したから急にできるようにならないです」の言葉が心に残りました。女性の生き方・ジェンダーイコールの感覚が、どんな時でも発揮できるよう、やれることを日々精進したい！

尾澤るみ子

今回の東北ツアーは、「震災と女性」にポイントを絞った旅でした。
2 泊 3 日の中で出会った女性たちは、東北ならではなのか、みなさんゆっくりした口調で、大きく主張するでもなく、でも芯に秘めた力を感じる話を聞かせてくださいました。みなさんの話の中に、周囲への気配りをすごく感じることができ、人とのつながりの中で暮らしておられる様子が印象的でした。ツアーコンダクターのパワフルな坂口さんには感謝しかありません。

永田よう子

東北で一言では語り尽くせない様々な苦難を乗り越え、活動をされておられる女性から、今自分ができることをされながら前向き進んでいるお話を聞かせていただき、自分自身がすごく勇気づけられました。またこのツアーを通じて、改めて人とのつながりの大切さを学ばせてもらいました。この出会いを忘れず、これからも東北のみなさんとつながっていきたいと思います。

丸岡千香

「災害を乗り越えて Wake up 人権！」が 2011 年 11 月、仙台で開催された全国シェルターシンポジウムのスローガンだった。なんと力強いメッセージだろう。あれから 5 年、実行委員を務めた女性たちの運動は、「災害時に困難な状況にある人を支援する」から「困難を抱える人を生み出さない」へと舵を切って進んでいる。震災後の歩みを時間ギリギリまで話してくださった皆様に心から感謝するとともに、会のツアープランを実行できるよう力を貸してくださった坂口一美さんに厚くお礼を申し上げたい。

森幸子

さまざまな地域、環境、立場の中で「自分ができることをする」という意志を力強く持ち続け、生き抜いておられた東北の女性のみなさんにたくさんお会いして、常日頃から災害が起きた後のことを意識しながら生きることの大切さを教えていただきました。すばらしい東北の女性の方々と、これからもずっと女性を支援する仲間として繋がっていきたいと思います。お世話になった皆様ありがとうございました。

門田加奈